Dear地球民

第２６号
2003年3月発行

編集発行　ゆがわら国際交流協会
〒259－0303　神奈川県足柄下郡湯河原町土肥1－7－1
湯河原町商工会内　TEL.0465－63－0111

The 17th やっさ国際交流

０２年７月３０日～８月６日

とても愛らしい台湾留学生による
振りを交えた台湾民謡の披露

底抜けに明るい
ブラジル留学生によるダンス披露

台湾、韓国、ブラジル、
ベトナム、ラオスの５ヶ国
から二十名の留学生が参加

The 17th やっさ国際交流

リュ・チャウ・ティ・タンさん(ベトナム)と
中村さん(吉浜)一家
（7月３０日湯河原町商工会館）

宋侖修さん(韓国)と渡辺さん(真鶴)一家
（7月３０日湯河原町商工会館）

書道体験(さすが台湾や韓国の学生は上手い)
（8月１日湯河原町商工会館）

楽しいお弁当タイム
(各国留学生やホストが一緒になって)
（8月１日幕山公園）

猛暑の足湯体験
(世界中皆んなファミリー)
（8月１日独歩の湯）

和気あいあいの花火見物
(間近で眺める花火にもうビックリ)
（8月３日吉浜海岸）

ホストファミリーと留学生の皆さん

茂田富士松（城堀） マニーチャン フォンマリー（ラオス）

杉山茂久（宮上） ファム ニョクタン（ベトナム）

中村明（吉浜） リュ チャウ ティ タン（ベトナム）

嶋岡浩二（吉浜） トビン ニュミ（ベトナム）

加藤功（宮上） 廖涵湄（台湾）

杉山有（宮下） 鄭烈紅（台湾）

中村てる子（吉浜） 権琅景（韓国）

平野良光（鍛冶屋） 朱ハンサン（韓国）

渡辺喜代美（真鶴） 宋倉修（韓国）

田代弘信（鍛冶屋） 崔鍾仁（韓国）

善本真人（鍛冶屋） レイラ・ガルシア ダット（ブラジル）

神野秀子（真鶴） マルシオ・ジュン ミズモト（ブラジル）

高京子（宮下） マリーナ キミエ・ハラ（ブラジル）

上萩昌子（吉浜） タチアーナ・アブラマン ゲルバチン（ブラジル）

脇山重子（真鶴） マイケル・シゲキ オオニシ（ブラジル）

秋山里花（土肥） 余瀛凡（台湾）

前田牧子（吉浜） 謝 紋（台湾）

福田宗徳（福浦） 林純瑜（台湾）

長谷川弘治（宮上） 顔怡如（台湾）

岩倉崇徳（中央） 金京淑（韓国）

高橋賢次（土肥） 山口達朗（日本）

踊り終わって「イエー」と廖涵湄さん（台湾）

すばらしい歌声を聞かせてくれたフォンマリーさん（ラオス）

注目を浴びた地球民連

ベトナム学生トリオのパフォーマンス

皆んな輪になって…

国際理解講座（０２．１１．７ａｔ商工会館）

世界の国、みんな違って、みんないい

好評だった牧野玲子先生

秋も深まった０２年１１月、悪天候にもかかわらず、約７０名の参加者を迎え、湯河原町商工会館において国際理解講座を開いた。講師の牧野玲子先生は長年日本語講師として活躍され、世界中の人々と接し、その経験の中から異文化について様々なお話しをしてくださいました。

「私と、小鳥と、鈴」　　作詩　金子みすず

わたしが　両手を　広げても、
　お空は　ちっとも　飛べないが、
飛べる　小鳥は　私のように、
　地べたを　速くは　走れない。
わたしが　体を　揺すっても、
　きれいな　音は　出ないけど、
あの　鳴る　鈴は　わたしのように、
　たくさんの　歌を　知らないよ。
鈴と　小鳥と　それから　わたし、
　みんな　違って　みんな　いい。

先生のお話はこの詩の朗読から始まった。

１９９０年頃から好景気や入国管理法の改正により海外からの移住者が急増し、現在では人口の1.4%が定住外国人という現状下で、異文化間の様々な問題が浮かび上がった。

豊橋市の保見団地では３割の住人が海外移住者で、ごみの投げ捨て、スプレーによる外壁への塗装、パーティーなどによる夜間騒音など日本人の常識では考えられないような問題が発生した。そこで住民は「保見団地を明るくする会」を作り、話合いを始めたところ、常識の違いはお互いの価値観の相違だったことに気付いた。お互いの良い所、悪い所を認識し、理解し合い、受け入れ合おうという結論に達した。

７０名以上の聴講生が集まった国際理解講座
(湯河原町商工会館大会議室)

世界中には様々な文化がある。

名前についても文化の違いが見られる。ファミリーネイムの存在しない国。養子に行っても姓を変えない国。親子で同姓同名の国。日本では家を尊重するため、姓を先に名乗るが、個を尊重する国々では個名を先に名乗る。

食については、もっと複雑である。犬、鯨など他国から批判されることの多い食材を伝統の食文化と考える国。多くの人が食べている魚を神様だから食べない国もある。宗教上の理由から様々な食の制限のある国、個人的理念からベジタリアンになる人など、理由も形態も様々である。

この他にも言語、色彩感覚、ファッション、日常生活など細かな相違点を多岐に渡り、具体例を用いて教えてくれた。

１９９０年に「文化的独自性の尊重、出身国との文化的つながり維持を妨げてはならない。」と国連条例が定められた。世界の人々が流動的になり、今後日本社会の中にも海外からの移住者が増えて来ることを考えると、多文化共生の考え方が必要になる。まさに金子みすずさんの詩のように「みんな違って、みんないい。」という考え方が求められているようである。

(by Kumi Kogure)

平成１４年度語学講座

○日本語講師育成講座
　02年6月22日～7月20日（全5回）　牧野玲子講師
○英会話講座（初級）
　02年6月13日～7月25日（全7回）　細見美也講師
○英語講座（はじめての英会話）
　02年10月9日～12月11日（全10回）　細見美也講師
○中国語講座（はじめての中国語）
　02年10月8日～11月19日（全7回）　林慶民講師
○中国語講座（楽しい中国語会話）
　02年11月28日～03年1月23日（全7回）　林慶民講師

ポートスティブンスより２０名来湯

０２年４月２０日より２３日までパートレット元市長はじめ老人グループ２０名が来湯、全員ホームステイを通して、町民との交流を深めた。

極寒の箱根での冷えた体を温めて…（独歩の湯）

記念品交換
（再会のパーレット元市長と米岡町長）
（４月２２日　湯河原温泉観光会館）

日豪の祖父と孫？
（”祖父”のディックと”孫”の金井さん）

皆んな薄着でブルブルの箱根観光
（４月２２日箱根大涌谷）

即墨市を訪問して

2002年１１月２１日～２４日

中国の山東半島の西南部に位置する即墨市。湯河原のように海に面して温泉があり、何か特別な親しみを感じる町です。“外国”というより何十年か前の日本にタイムスリップしたような懐かしい雰囲気を持っています。

私達は即墨および青島人民政府から熱烈な歓迎を受け、彼らの案内で2日間、即墨市内の観光、温泉視察、農民家庭と高等学校の訪問を行いました。

最も印象が強かったのは農民家庭の訪問です。即墨の人々と直接触れ合うことが今回の大きな目的です。2人ずつに分かれ、いろいろな家庭を訪問ました。私が訪問した家庭は、老父母の2人暮しです。崩れかけたレンガの小さな家に住んでいました。中国都市部では騒音防止等のため、犬を飼うことは禁止されていますが、家の外に大きなシェパードを飼っていました。家の中は、中心部にお湯を沸かす場所があり、その奥に2人の生活する部屋がありました。6畳程の部屋は入るとすぐ床が1メートル程高くなっていて、小さな梯子で上に登るようになっています。床はとても暖かく、座って見て驚きました。食事を作った時に起こした火の熱が床の下から伝わって来るようになっているのです。寒い冬でも温かく眠ることができるそうです。

上海市中央広場での社交ダンスにびっくり(朝６時)

2人は私達を温かく迎え入れてくれました。部屋の中はテレビが1つあり、中国伝統の絵がいくつか飾ってありました。彼らの生活はとても質素でした。おじいさんは仕事を引退して、毎日お酒を飲みながら、仲間と過ごしています。おばあさんは息子と小さな孫の写真を私達に見せ、彼らの家を訪れたり、一緒に食事をすることが一番の楽しみだと言っていました。そこにはスケジュールに追われることのない、ゆったりとした時間が流れていました。ほんの数時間でしたが、彼らは笑顔で様々な話しをしてくれました。彼らの純粋で温かな気持ちが心の底に伝わって来るようでした。このような温かい心を持った彼らと湯河原町が少しずつ繋がって欲しいと思いました。

高等学校訪問では、特に”教育”に力を入れているという印象を受けました。生徒達が日本並みの受験戦争と戦っていること、IT指導が進んでいること等、先進的な部分を垣間見て驚きました。都市部と農村部、老人と若者の生活は日本よりも格差があるようです。中国では毎年こうしたことが問題になっていますが、即墨市はこれから急速に発展するだろうという印象を強く受けました。人民政府の判断によると、今はまだホームステイ等、湯河原町と即墨市が行き来をして交流するのは経済的に難しいということです。段階を踏んで、学生同士の絵画交換やe-mailのやりとり等、小さな交流から始め行って欲しいと思います。日本の学生達は、まだまだ中国に触れる機会が少ないです。しかし中国は急成長をし続けています。今後社会に出て活躍する若者達にとって、中国は切り離せない存在となる

はずです。だからこそ、小さな交流をもとに、少しでも中国を知ってもらいたいと思います。

今回の視察は、直接市民や学生達と話すことができ、とても有意義なものでした。最大の収穫は彼らの交流に対する意欲を肌で感じることができたということです。私は、今後、この経験をもとに、即墨市と湯河原町の交流の手助けをして行きたいと思います。

最後に、このような機会を与えてくださった皆様方に心より感謝しています。本当にありがとうございました。

(by Satoka Akiyama)

農民家庭訪問
（とても温かい家族でした。左端：筆者‥即墨市）

★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆

斎藤幸彦氏にフィジーの話しを聞く
２００２年６月６日

０２年６月６日、湯河原町商工会館において、第１５回総会が開催され、総会終了後に元日商岩井の斎藤幸彦氏より「フィジーについて」の講演をいただいた。

「小田原地球市民フェスタ」に参加
２００３年２月１６日

「地球市民フェスタ」が０３年２月１６日に小田原で開催され、当協会も活動内容をパネル展示の形で参加した。また、協会パンフレットと機関誌「Dear地球民Ｎｏ２５」を配布した。

カンボジア古典舞踊団滞在の支援
２００２年９月２５日～１０月１７日

カンボジア少年少女古典舞踊団３０名が各地での公演のため来日、２３日間を湯河原で滞在した。当協会ではホームステイを含め、滞在中の支援を行った。

楽しかったＸマスパーティー
２００２年１２月２２日

当協会恒例のＸマスパーティーが０２年１２月１２日に湯河原童夢で開催された。

参加者は大人３９名、子供１４名、計５３名を数えた。歌やビンゴ、オークションなどでたのしい一時を過ごした。

Ｘマスオークション売上金の送り先

０２年１２月２２日に行ったＸマスパーティー恒例のオークション売上金５４，６５０円は下記各団体に送金させていただきました。

○ アブサラプロジェクト（カンボジア教育支援）	¥14,650
○ NESA（ネパール教育支援）	¥10,000
○ シャプラニール（バングラディシュ・ネパール農民自立支援）	¥10,000
○ あしなが育英会（遺児支援金）	¥5,000
○ あしなが育英会（海外遺児心の支援口）	¥5,000
○ ワラブンヤ（バングラディシュ孤児院支援）	¥10,000

ワールドカップを通じて日本を見た

平成14年6月、韓国と共催のワールドカップが行われ、フーリガン騒動もなく無事終了した。世界的な規模のスポーツイベントは、FIFAワールドカップの統計によれば、日韓両国だけでも270万人の観客を動員したという。

このイベントから多くの事柄を知った。その一つは、日本人はホスピタリティー（親切にもてなすこと）マインドがあること。

今回アフリカ・カメルーン・サッカーチームを受け入れ、一番話題になった大分県中津江村の歓迎ぶりがニュースとして報道された。村民の姿が素朴で、何のてらいもなく、面倒を見ることになった。到着時間が度々変更になった。パスポートを持たずに出国した選手がいたとか、日本人には信じられない話題まで提供してくれた。

第1戦で強敵アイルランドと引き分け、第２戦ではサウジアラビアに勝った。村民200人が大型テレビの前で応援、1点を守りきった試合で引き分けに終わった後、踊り隊「風」が花笠音頭で勝利を祝った。世界の人々にあふれるホスピタリティぶりをアッピールしたことだろう。

また、スタンドでは日本の若者が外国チームを応援し、外国人の目から見て、考えられない姿だったらしい。つまり外国では一種の国同士の戦いであり、ナショナリズムを発揮する戦場だとさえ、あるスポーツ評論家の言葉を聞いたことがある。

一方、韓国の選手が準決勝まで勝ち進み、大統領が感動して、その褒賞として若い選手に兵役を免除するとまで宣言し、勲章まで与えられた。

兵役免除というこの重い言葉は、どのように韓国の若い人たちに響いただろうか。案の定、戦争状態にある現実、北朝鮮の海戦の挑戦が現実に起こった。しかも兵役免除の恩恵を受けた同年齢の韓国の海軍兵士がこの戦いで4人も戦死している。

この厳しい現実に常時晒されている韓国は気の毒という以外に言葉はないが、平和を享受している日本の姿と比較して見たくもなるのだ。

日本のサポーターが日の丸の旗を振り、国家を歌う姿は、なるほどナショナリズムの典型的な姿だったが、これを悪く言う人の声は、少なくとも、このシーズン中には聞こえなかった。さわやかな1ヶ月だった。言葉が通じない場面で、誠意を見せる姿は実にほほえましいものだ。爽やかな6月の陽の当たる日々だった。

（　石井立夫　）

（中津江村は合併問題が起きており、地元民は名称を残す運動をしている。賛成だ。）

ご寄稿を待ってま～す!!

会員の皆様の機関誌「Dear地球民」です。エッセイでも、短歌や俳句、絵画や漫画、写真、何でも結構です。どしどしご応募下さい。皆様の作品でいっぱいにしたいと願っています。

（提出先：湯河原町商工会内事務局）